
研究ノート

伊吹島の観光の可能性

稲田道彦
大賀睦夫
金徳謙

1 はじめに

本論は異なる分野の研究者が香川県伊吹島で共同調査を行い、それぞれの研究方法でもって伊吹島の観光の可能性についての考察を行った小論である。伊吹島は香川県の西の端にある島である。伊吹島を案内してくださった三好兼光氏は瀬戸内海の地図を示され、伊吹島は香川県においては時に地図から省かれるほどの周辺としての扱いを受けているが、瀬戸内海の地図においては中心の位置にあることを強調された。三島や新居浜にも、福山にも、笠岡にも、そして観音寺、丸亀、高松にもどこにでも短い時間でいくことのできる中心地であることを示された。確かに海から見ている人にとって伊吹島の持つ地理的位置は大きな意味を持つと思われる。

東瀬戸内海の中心的な位置にある島として伊吹島をみると伊吹島が日本の歴史で果たした役割は大きいものと映ってくる。伊吹島を事例としながら、日本の島嶼の観光について考察したいと考えている。2013年には瀬戸内国際芸術祭の開催地の一つに挙げられている。さらに我々は伊吹島について考察を加えていくことを企画している。

1章と3章は稲田道彦、2章は金徳謙、4章は大賀睦夫が執筆した。参考文献等はそれぞれの文章のスタイルに従うことにした。また、それぞれの章で完結することを考え、あえて統一した終章をもうけなかった。

2 観光サステイナビリティ

観光は非日常体験といわれ、日常生活圏から一時的に離れることと定義される。そのことから交通手段は観光の成立に欠かせない重要な構成要素であることが簡単に推測できる。多くの観光地において交通アクセスにおける選択肢の増加や利便性の改善を図ることで、集客の増加に一定の効果が得られた。それらのことも交通手段が重要であることが分かる。他方で、交通手段の変化が集客の増減以外にも、観光形態や観光地の変容などに多大な影響を与えている。しかしそのことはあまり認識されていない。

本章では、交通手段の変化がもたらした観光形態の変化およびそれによる地域の変容を時系列に分析し、香川県の最西端の島、伊吹島における今後の観光の可能性を考察する。

(1) 観光と交通手段

1) 観光の普及と交通手段

歴史的にみて一般庶民が観光を楽しめるようになるのは江戸時代の伊勢参詣からと言っていただろう。当時の多くの人が観光として楽しんでいた伊勢参詣は徒歩によるもので、数ヶ月にも及ぶ長期にわたる行程になっていた。そのことは多くの文献を通して確認できる。移動速度は遅く、観光の対象は社寺観光地や温泉地程度に限られていた。

その後、明治期や昭和初期になると外国人の来日や日本人の旅行も著しく増加する。移動にも船による「海の道」と、陸上では速くかつ大量に輸送できる鉄道による「陸の道」が主要交通手段として定着していった。こうした移動速度の向上は観光行動の範囲を拡大させ、観光対象の拡大をもたらす結果となった。もう一つの大きな変化は、旅行期間が徒歩による時代に比べ大幅に短くなった、いわゆる旅行期間の短縮である。とくに、旅行目的地までの移動時間が大幅に短縮された。このような目的地までのアクセス利便性の向上への変化はその後もつづき、旅行への負担が大幅に軽減されるようになっていった。つまり、旅行がより身近な存在となったのである。1960

年代に入り観光はさらに急速に普及し、観光が社会現象となる、いわゆる、マス・ツーリズムの時代を迎えることになる。そこにも移動手段の進化の貢献は大きい。多くの人を短時間で観光地まで運ぶことが可能になったことがそれであり、その後も移動速度はさらに速くなる。また、一度に運べる輸送能力も大幅に増大する。例えば、鉄道や航空機の進化、その中でも新幹線の登場やジャンボジェット機の登場がそれに当たる。ジャンボ機の登場は「空の道」の普及をもたらしした。また、「大量に」、「速く」に並行して、自動車の普及はマイカーブームを引き起こし、家族や仲間との旅行が普及することになった。いわゆる「旅行サイズのコンパクト化」が進展することになった。旅行サイズのコンパクト化は、その後さらに加速し、少人数での旅行や一人旅が大幅に増加していった。

このように交通手段の発達および旅行サイズのコンパクト化は観光をさらに普及させた。その結果、観光は生活の一部として認識されるまでに拡大し、定着した。本節で述べてきた移動速度の向上および旅行サイズの縮小の傾向の時系列的变化は図1のようにまとめられる。

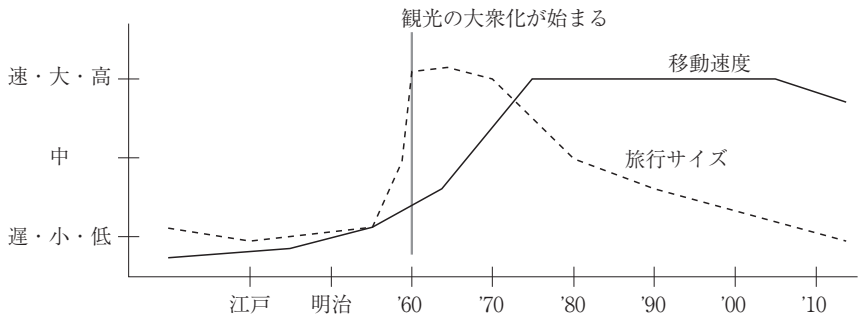


図1 移動速度と観光形態の変化

2) 地域の変容と交通手段

これまで旅行や観光を楽しむ観光者の視点から述べてきた。ここからは視点を換え、観光者が訪れる観光地を中心とする地域の視点から述べていく。

「現在観光地と認識されている地域も、かつては無名で何でもない普通の地域で

あったが、徐々に訪れる観光者が増加し観光地になり、現在に至っている。今後いつまで観光地としての役割を果たし続けるか誰も予知できない。しかし、いずれは訪れる観光者が減少しかつての無名の地域に戻ってしまう」とする、観光地の盛衰に関する考え方がある。このような観光地の盛衰に関連して、R. Butler (1980) の観光地発展段階論が日本ではもっとも知られており、地域振興や観光地計画など様々な分野で参考にされている。現在観光地である地域が今後も観光地としての役割を果たし続けるために、また、訪れる観光者をさらに増やし観光地としての役割をさらに拡大するために、様々な対策を講ずる地域が増加してきている。

本節では観光地の盛衰をもたらす影響要因に着目する。その要因に様々なことが考えられるが、その中のひとつに交通手段をあげることができる。

交通手段の発達には地域に賑わいをもたらしたり、賑わっている地域を衰退させたり、地域に様々な影響を与えている。例えば、古くから賑わっていた静岡県熱海温泉の場合、東海道新幹線の開通で訪れる観光者が減り始め、現在はかつての賑わいとは程遠い状態になっている。また、大分県別府温泉の場合、関西汽船による京阪神地域からの観光者の増加で徐々に知名度をあげていき、昭和40年代には全国でもっとも賑わう温泉地となるが、その後訪れる観光者は減少していく。しかし、別府温泉は現在でも日本を代表する温泉観光地に位置づけられている。前者のように交通利便性向上で衰退する観光地や、後者のように大量の観光者を運び込める交通手段の影響で大きく成長する観光地などで分かるように、交通手段が地域に与える影響は非常に大きい。

交通手段の変化が観光地の人気を変えたのである。このことは、移動速度の向上は観光資源に対する評価尺度の変化をもたらすと言い換えることができる。

(2) 観光資源の評価と交通手段

ここでは前節での移動速度と観光資源の評価を取り上げ、さらに詳しく述べていく。

移動速度の向上は交通手段の発達に起因するもので、それら交通手段が通る経路は図2の主要移動経路のように表現できる。かつて瀬戸内海が移動の主要ルートであっ

た時代は「海の道」を、鉄道の普及や新幹線の開通と延長による鉄道の時代は「陸の道」を、ジェット機の普及による航空運賃の低価格化が進んだ時代には「空の道」を主な移動経路とした。こうした海の道から陸の道に、さらに空の道へと、移動速度の向上につれ、観光地に対する認識、いわゆる評価は大きく変化した。例えば、朝鮮通信使や欧米から来日した人々は瀬戸内海を通った。彼らの瀬戸内海に対する評価は高かった。また、現在も観光地と認識されているところが多く残る。瀬戸内海は国立公園の第一回目の指定を受けるが、多くの外国からの観光者の高い評価に関係している。当時の観光者の視点は海からのもので、瀬戸内海は高く評価された。しかし、その後、観光に用いられる移動手段は大きく変わり、陸の道に変わっていった。その結果、多くの観光者は海からの瀬戸内海の風景や周辺地域の良さをみることができなくなり、次第に評価対象から外され、陸の道でアクセスできる観光地の評価が向上するようになった。移動速度が速くなる傾向はさらに加速し、陸の道から空の道に変わっていった。それまで陸の道からみて良い評価を受けた地域に対する評価も、一瞬で通過してしまう空からは従来通りの良い評価が受けられず、観光地としての魅力が低下していった。

ここまで述べてきたことを踏まえると、海の道から陸の道に、さらに空の道にと移動速度の向上により、観光地に対する認識、いわゆる評価も変化していったことが分かる。

このように、観光が普及して以来、とくに、観光目的地までの移動速度が重視されてきたが、近年静かに拡大している大型クルーザーなどによる旅行の場合、従来の旅行と異なり移動速度がゆっくりとしている。従来の目的地までの移動速度を重視する旅行形態から移動速度がゆっくりとした旅行形態への変化である。まだ利用者は少なく、かつての海の道とは異なり、海の道そのものを観光の対象としようとする、つまり楽しもうとする評価基準の変化として捕らえることができる。

ここまで述べてきた移動速度と主要移動経路について、さらに、海の道の時代に高い評価を受けていた瀬戸内海および周辺地域に対する観光資源としての評価の変化は図2の様にまとめることができる。

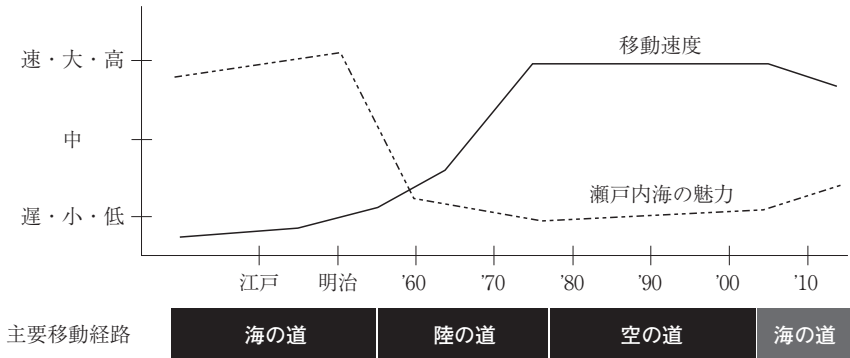


図2 移動速度と地域の魅力

(3) 観光資源としての伊吹島

ここまで移動速度、観光形態（旅行のサイズ）、および地域魅力の変化について述べ、それらの変化をもたらした要因に交通手段の変化による主な移動経路の変化をあげた。移動経路が変わった結果、観光資源を評価する視点が変わり、地域に対する評価が変わってきていることを指摘した。

本節では前節までの議論を基に、伊吹島を観光資源としての視点から見直しを行う。

従来の移動経路である陸の道や空の道から伊吹島を観ると、香川県最西端の島に過ぎなく、立地の悪さやアクセスの利便性の低さなどが考えられ、観光地としての魅力を感じることはできない。もちろん、このような評価はマス・ツーリズムが普及し始まる時代から現在まで変わらない評価といえよう。その結果、マス・ツーリズムの全盛期といえる時代（図3参照）における伊吹島は、瀬戸内海の島嶼地域がそうであるように、観光地としての認識はほとんどなかったともいえる。しかし、かつての海の道の時代にはそれらの地域の評価は高かった。

つまり、伊吹島の評価を現在の尺度で行い続ける限り、観光資源としての価値が上がる（評価が向上する）ことは極めて難しい。しかし他方で、このような低い評価は伊吹島の乱開発などを防ぐ役割を果たしたともいえる。近年の観光形態が移動速度重視の陸の道や空の道を利用するマス・ツーリズム形態から、かつて瀬戸内海が高く評価された海の道を利用する脱マス・ツーリズム形態へと変化の兆しが見られる中、伊

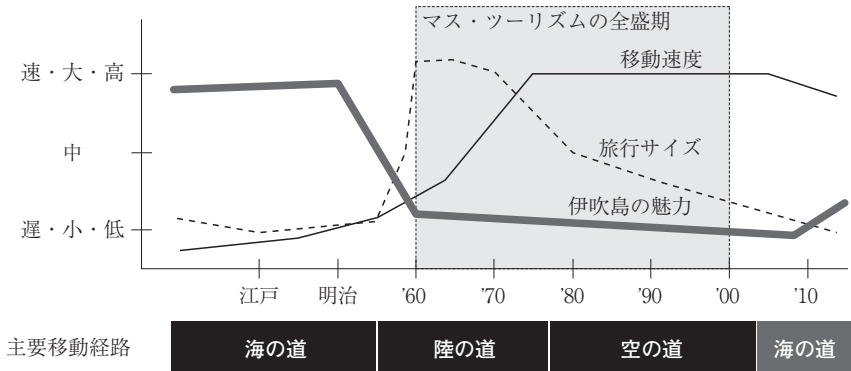


図3 観光資源としての伊吹島の魅力

吹島の観光資源としての価値は再び向上するといえる。また、マス・ツーリズム全盛期に乱開発されず、守られ続けてきた島内に点在する歴史的、文化的資源は伊吹島の資源としての価値をさらに高める重要な資源になるといえる。

マス・ツーリズムからサステナブルツーリズムへ変化していく、大きな観光のながれから推測すると、従来のマス・ツーリズム時代には評価されなかった様々な資源が再評価されることになるかと期待できる（図3参照）。

(4) 地域振興と海の道

観光資源としての瀬戸内海の評価が変化していることは、瀬戸内海の周辺各地における取り込みからも確認される。とくに、広島県は周辺の他県より積極的に取り組んでおり、「瀬戸内 海の道構想」がそれに当たる。広島県は、かつての海の道時代に高い評価を受けた県内の各地を海の道などでつなぐことにより地域に対する観光資源としての価値を高めようとする政策を推し進めている。

視点を陸から海に変えることで、それまで観ることができなかった新たな地域の魅力が観えることをフルに活かした地域振興を図ることといえる。これまでの観光が、ハコモノをつくり集客を図ったのに対して、これからの観光は地域に有する歴史的、文化的資源を活かした取り組みといえる。つまり、ハード・ツーリズムからソフト・

ツーリズムへの変化であり、このような動きは世界的な動きといえ、日本でもゆっくりではあるが普及し始まっている。速いことが良いことであった時代から、ゆっくりとした移動が評価される時代を迎えている今日、沿岸島嶼部における地域振興に新しい風が吹くことと筆者は確信する。瀬戸内海島嶼地域における観光サステイナビリティの時代の到来である。

本章では、人々の観光行動に関連することから、地域の観光資源としての価値を見直すための視点提供、認識の再考を図った。また、伊吹島の今後の観光資源としての価値の高さを考察してきた。今後、これらの視点を基に伊吹島での調査をさらに進めていきたい。

参 考 文 献

Butler, R. W. (1980). The concept of a tourist area cycle of evolution: Implications for management of resources. *Canadian Geographer* 24(1): 5-12.

参 考 U R L

広島県瀬戸内 海の道構想 (2013年1月4日現在) : <http://www.pref.hiroshima.lg.jp/soshiki/234/1306742356416.html>

(金 徳謙)

3 伊吹島の町歩き観光の提案

(1) 町歩き観光のおこり

町歩き観光は「住んでよし、訪れてよしの国づくり」のキャッチフレーズにもりこまれた精神をよりどころにして全国的な動きに広まっていったと考えている。これは2003(平成15)年4月24日の観光立国懇談会報告書の中にうたわれたキャッチフレーズである。

それまでの主流となっていた観光はいわゆる「観光地」を団体旅行客が集団で訪れるという形式であった。このことは日本の時代背景がそうさせていたところがあった

と考えている。振り返ると日本は第二次世界大戦の敗戦国である。工場などの生産設備は戦争中の空爆によってことごとく破壊されていた。第二次世界大戦後は世界の最貧国として出発した。日本の経済が復興する大きな要因の一つは優秀な労働力にあった。戦後の日本人は貧しさを克服するために安い賃金で長時間働き、努力を惜しまない国民の労働が国内に富を蓄積していった。軽工業で資金を蓄積し、重工業へと国内産業を育てていった。日夜働いた庶民の賃金が上がり、貯金をし、生活に少しの余裕を見いだした時に、庶民が見つけた楽しみが一泊ないし日帰りの旅行であった。この時代の多くの旅行形態がバスで移動し、多くの人に定評のある観光地を回り、豪華な食事がつくことが通例であった。こういう旅行で非日常の時を過ごし、日常の生活苦の鬱憤を晴らす事が多かった。ここで訪れる観光地は多くの人に訪れる価値があるという評価を得、かつ大人数で同時に訪問できて、一般的な意味で人々を誘引できる価値を与えることのできる観光地が選ばれた。逆に言うと団体旅行に適した場所が観光地として選定されていった。昔からあった観光地が団体旅行仕様というべき観光地スタイルに変身することもあった。

町歩き観光は団体旅行でも行われるが、基本形態は個人旅行である。従来の団体旅行では、行きやすさや、多くの人の共感を呼びやすいという視点で確立した観光地を訪問することがなされた。それに対して新しい個人旅行では、観光者が主体的に観光地を選び、旅行計画を立て、自分の目的に合うよう自己判断に重きを置く形式である。どこを訪問するかという点では観光者の生き方の価値観からくる選択基準が出てくる。観光情報を自分で選び、自分で旅行計画を立てる形をとる。団体旅行で訪れていた観光地と、個人旅行で訪れる観光地は、観光者にとって、主体性が強調され、観光地を選択する基準が変わってきていると考えている。

「住んでよし、訪れてよしの国づくり」の精神の地元住民が「よく住んでいる」場所が他の地域に住む人にとっても魅力的に見え、そこが観光する場所となりやすいという図式を生んでいる。

その中で、自分が暮らす領域外の世界で暮らす人の生活を見ることにより、比べて自分の生活の価値などを逆照射することが可能になり、自分の生きている生き方の様式である自分が保持している文化を認識することであると考えている。こういう旅行

は漫然と他の人の提案に従っていた旅行に比べると旅から得る感情は格段に質の高いものになっている。

筆者は以前に「人生を考えるツーリズム」を提唱したことがある(稲田道彦, 2010)。物見遊山を主眼とする観光地から、自分が生きる上で必要な思想を涵養するための観光地があるのではないかという主張である。これらを加えると、観光地のバラエティが格段に増加する。

この報告の前までもこの考えを実現する観光の動きはあったと思われる。歴史的な検証をしたわけではないが、筆者の印象に残っている知識で言うと、早いと考えられる「別府のオンパク」の町歩きや「長崎さるく」の町歩きがあったと思われる。

伊吹島の本土に当たる観音寺でも町歩きが行われている(稲田道彦, 2008)。さて観音寺で行われているのと同様のポリシーで伊吹島において町歩きを提案してみたい。町歩きは地域外の人が訪れてみたいという気持ちを誘う観光のやり方である。

(2) 伊吹島町歩き観光の観光地の提案

① 生活環境を観光地としてみる

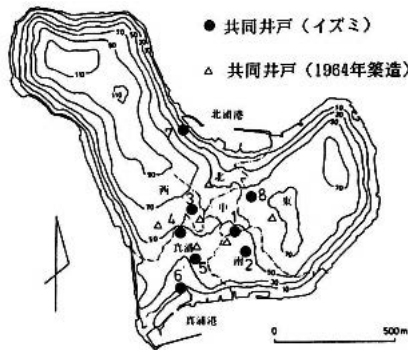
伊吹島の特異な自然環境は島が岩盤でできている地形環境である。土壌の蓄積が乏しく1メートルも掘ると岩盤に行きあたるといふ。この地質から来る環境は、何に困るであろうか? 飲料水の確保の困難, 農業の不活性, 森林に由来する燃料不足等が思いつく。伊吹島はこれらすべてが当てはまる島である。でも伊吹島に多くの人が住み続けた。その大きな理由は瀬戸内海の中に占める好位置のためである。周辺にある好漁場から至近の距離にある漁業基地としての機能が産業を維持した。人口が増え、家は密集した集落となった。

では人々の水はどのように得たのであろうか? 現在は海底送水で本土から送られるが、それまでは自分たちで解決しなければならない問題であった。各家では雨水をためる施設があった。屋根に降った水を集める樋を1カ所の井戸という水溜に集めそれを各家の飲料水とした。集落には大井戸が作られた。これも降った雨水を大規模にためる施設で、雨水は側溝を伝ってこの井戸に至るようになっていた。この島中の水を集めるシステムも見事であった。現在は使われなくなったが、これを作るに至った

島民の意思は十分伝わってくる。水の使い方の取り決めも慣習的に決まっていた。わかしたお風呂を何日も数家族でもらい合う習慣とか、水を使う順番、例えば、食器を洗った水を捨てないで洗濯に使うというような慣習ができてきた。これらは本土からの水が送られるようになってすべて解消した。こういう生活に必須の水を巡る島の生活の工夫を巡ることは水が必要な人間の生活を知り、島で生活する生活環境の重みを知ることになる。

古い時代の火山の溶岩が起源の伊吹島では周囲が崖で頂上が平らな地形を作っている。人々は山頂部に集落を形成している。島に来た人は港からすぐに急な坂道を登ることになる。島を訪れた学生、井平博明（2011）は島の老人から「この坂を登れなくなったら、死ぬつもりじゃ」との言葉を聞き出している。この地形に住む人の覚悟が伝わってくる。

石門も伊吹島の地質の成り立ちに関する地形で、大きな石のアーチができている。干潮の時間帯にだけ行けるが、石門を通して、島の地形を知ってほしい。多島海の瀬戸内海にあって島がまばらに存在する燧灘に位置する伊吹島から燧灘越しに沈む夕日の風景もすばらしい。伊吹島の位置がもっている意味を感じる瞬間である。



第14図 伊吹島の共同井戸 (イズミ)

- | | | | |
|-------|--------|-------|--------|
| 1 ヒラヤ | 2 ゼンネ | 3 オコジ | 4 ツクダ |
| 5 オトリ | 6 オワンダ | 7 クロワ | 8 テラマチ |

図1 伊吹島の井戸 (1987) (山崎和他 44 p より引用 新見治作成)

② 生活文化を観光地にする

伊吹島はイリコの産地である。現在では島の沿岸に17の工場が並んでいる。網元の制度で運営されている。網元が船や加工場を所有し、それぞれの加工の過程に必要な人員を雇用している。カタクチイワシの操業期は6月から9月と短い、その間に1年分の収入を得てしまう。この時期は戦場のような忙しさになる。こういう時期に観光客の相手をしている余裕はない。でも観光者にとっては島の魅力をみることのできる時期である。遠くから邪魔にならないように見せてもらう。ここに観音寺本土の「エプロンガイド」のような町歩きガイドのようなシステムがあると、観光者とイリコ産業に携わる人の共存につながる。このことに産業者のメリットが少ないように見えるが、製造現場をみてもうことは伊吹島イリコのブランド力をあげるのに大

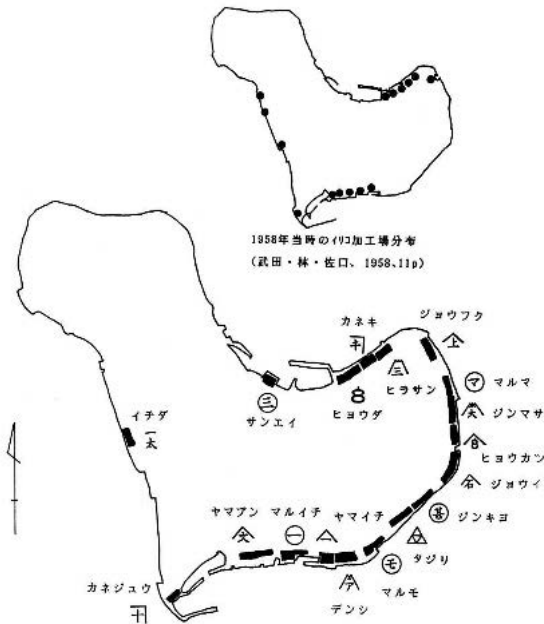


図2 イリコ工場の分布（1988年作成、この図のうち現在1社（イチダ）が廃業している）（山崎和他より引用 30p 稲田道彦作成）

大きく貢献すると考える。伊吹島で迅速に大量に国産のイリコの製造現場を目の当たりにする感動は大きい。そこで生産されるイリコのありがたさが伝わってくるし、尊重する気持ちになる。高価になり、購入を敬遠する消費者に購入を促す大きな説得力になる。また各家庭の調理の過程で使われなくなりつつあるイリコの復権につながる。

出部屋習俗、これは古い日本人の持っていた「赤不浄^{あかふじょう}」と称する血を忌む習俗からくる習慣である。出血をみる出産をケガレと位置づけ、生活する家庭から切り離し別の場所で行うという習慣である。伊吹島には「伊吹産院」として出部屋の建物が撤去されたが敷地のみが残されている。若い嫁である妊産婦が出部屋で出産することで家事から解放され、同世代の女性から子供の育て方などを学ぶ場所としてあった。出部屋は島の女性の生活にとって生き方を形成する大きな場所であった。伊吹島の女性にとって出部屋仲間は一生のつきあいを生む源泉であった。これも適切な町歩きガイドの説明によって説明されると島で生活することの重圧と楽しみや喜びがよく伝わってくる場所である。

更に習俗に関することであるが、岩盤の島であることにより深い穴が掘れないことに影響を受けている、古い墓をみてもらいたい。埋葬した上に石を積み上げ、積み上



図3 伊吹島墓地の分布図(山崎和他より引用 38p 稲田道彦作成)

げた石の中に空間を作り、その中に祭祀物を置く島独特の墓である。この石積みの上に石塔が載せられている。この墓の形式は土葬による両墓制であったというが、現在ではなぜこのような形式の墓を生み出したのか詳細な説明を聞くことは難しくなっている。ただ岩盤の島がこういう習俗を生んだのではという推測をするのみである。墓にも伊吹島で暮らしてきた人々の名残をみてもらいたい。

(3) ま と め

人は自分が暮らす場所に適応し、少しでも住みやすく、安定した生活を築く努力をしてきた。島で暮らすことは制約がもっと多い場所での生活を示してくれる。美しい瀬戸内海にはめこまれた伊吹島であるが特異な環境でそこに住む技術を編み出してきた伊吹島をみてもらいたい。これは他の地域から来た人には驚きであり、大いなる納得を得る事柄である。この動きを助けるのが町歩き観光である。

参 考 文 献

- 稲田道彦 (2008) 「授業で「新しい観光」の取り組み 観音寺市での経験から」香川大学経済学部ツーリズム研究会編『新しい観光の可能性』美功社, 149-170 p
- 稲田道彦 (2010) 「「人生を考えるツーリズム」の確立をめざして」香川大学ツーリズム研究会編『地域観光の文化と戦略』リーブル出版, 65-84 p
- 井平博明 (2011) 「立ちほだかる伊吹島の坂道」香川大学瀬戸内圏研究センター編『島へ行くよ』美功社, 172-175 p
- 山崎和・稲田道彦・新見治 (1987) 「瀬戸内海東部島嶼地域の変貌に関する基礎研究—香川県伊吹島の事例を中心に—」昭和62年度福武学術文化振興財団研究助成研究成果報告書, 1-68 p

(稲田道彦)

4 「学び」のツーリズム

(1) はじめに

本章では、「学び」としてのツーリズムという視点で伊吹島観光について考えてみたい。そもそもわれわれはなぜ旅をするのか。観光政策審議会答申第39号には、「旅

は、すべての人にとって本源的な欲求である。人は旅により日常から離れ、未知の自然、人、文化、環境と出会い、そして新たな自分を発見する。」と書かれている。まことに「旅をとおしての学び」は人間にとって根源的欲求といえよう。学びといえば、われわれはまず読書を想起するのであるが、文章にならない重要な情報が大量にあるわけで、それを得るためにはどうしても現場に向かなければならないのである。柳田國男は、旅は読書と同じものだと言っている（『定本 柳田國男集 第25巻』115ページ）。そして、読書によい読書とそうでないものがあるように、旅もよい旅ををなさいという。未知の土地に行き、異なる自然や文化に出会い、新たな自分を発見する、そういうことができれば、それはすばらしい旅といえるだろう。

学びをテーマにした旅の目的地として、伊吹島はたいへん魅力的な島である。ロマンあふれる歴史、出部屋・娘遍路・島四国・古い京言葉のアクセントなどの民俗資料、日本一のいりに代表される漁業の島等々。それらが周囲5.4キロメートルの小さな島に凝縮されている。そして島全体に古い日本の風景が残っている。現在の日本はどこに行っても近代的建造物であふれ変化に乏しい。これに対し、伊吹島には美しい自然があり、自然と調和した昔ながらの人々の暮らしがある。島の道幅は狭く、広い道でも走る車は軽自動車までである。木造家屋の間を江戸時代から変わらない狭い路地が縦横に走っている。石垣があり、石畳があり、古い家屋には、木造船を解体した船板が家の壁として再利用されたりしている。現代の日本ではほとんど失われた懐かしい風景がそこにある。そのような伊吹島の旅からわれわれは何を学ぶことができるだろうか。以下で考えてみたい。

(2) 歴史を学ぶ

これまで島に外部から新しい人が移り住むことはまれだったのであろう。伊吹島は、古の社会がそのまま連綿と今日まで続いている島のようなものである。古い時代のなごりを容易に見出すことができるのである。たとえば、現在の島民の多くが三好さんと合田さんである。いずれも戦国時代に定住するようになった一族の子孫だという。合田氏の由来は不明であるが、伊吹島の三好氏は、伝承によると、戦国大名の三好長慶、そしてその後継者となった義継の末裔とされる。京で権勢を誇った三好氏の子孫が、

いかにしてはるばるこの伊吹島にたどり着いたのだろうか。

1573年、武田信玄が死去すると信長包囲網は瓦解し、朝倉義景、浅井長政は信長に滅ばされた。信長はさらに、信長包囲網の黒幕であった足利義昭を、彼の妹婿三好義継のもとに追放した。しかし、義継は義昭に同調して反抗したため、若江城の戦いで信長は義継を討った。三好本家はこうして滅びるのであるが、その遺児義兼、義茂が、一族である十河家を頼って讃岐に落ちのび、最後は伊吹島に落ち着いたということらしい。『観音寺市誌』には、「ともあれ三好家の跡を絶やさぬという（十河）存保のはからいで、まず弟義茂は大川市太郎と改名、1573年この島に来住し、次いで1587年兄義兼が阿波より来住したと伝えられる」と記されている（912ページ）。先に定住していた合田氏との激しい戦いもあった。三好・合田の両首領が倒れたのち、平和な社会がつくられたという。

伊吹島の歴史・民俗の研究家、三好兼光氏のホームページ『伊吹島の概要』に掲載されている伊吹島の民話、第9話「京目の話」が印象深い。それはこんな話である。「天正の昔、合田さんと三好さんの戦いがあったことは、何回も話していますが、義兼が鉄砲石で自刃した後、戦いすんで日が暮れて、一時、身をひそめていた、三好館にいた子女は、館の上の高台に登り、東の空を偲んで望郷の念にかられ、涙したと伝えられています。『京都に帰りたい。』日が暮れ、暗くなっても、東の海の向こうを、見つめていました。この戦いで、本宮さん、泉蔵坊も兵火にあい、全焼してしまいました。三好の子女の涙したところを、京目と言って、今も地名が残っています。」

伊吹島から東方面には、海を隔てて豊浜、観音寺、仁尾の山々が連なり、その向こうに広大な空が広がっている。400年ほど昔、この場所から、その空の向こうの京を望郷の思いで見つめていた人々がいたのだと思うと感慨深い。このような歴史の一コマが歴史書に書かれることはないが、伊吹島の人々には深い共感をもって心に刻まれ、地名にまでなったのであろう。三好一族の歴史は、伊吹島の人々にとってアイデンティティの中核にあるものではないだろうか。

再度柳田國男のことは借りると、歴史は「世の中とわれわれを繋ぐ最も大切な智識」である（『定本 柳田國男集 第25巻』128ページ）。歴史を学ぶことで、われわれは日本人となり、その地域の間人となり、そこから愛郷心も生まれてくる。伊吹

島への旅をきっかけに、われわれも意外に知らない地域の歴史を学んでみたいものである。

(3) 民俗を学ぶ

伊吹島は民俗学的に興味深い島である。箇条書き風に取り上げてみよう。

第一に、伊吹島の歴史と関係するのであろうが、わが国で唯一、平安、鎌倉時代の京都の言葉のアクセントが残っている島だという。これは多くの言語学者によって注目されてきたところであり、金田一春彦博士が二度来島して確認している。

第二、伊吹島には出部屋という産婦が産後一カ月間こもる産屋があった。月経や出産は赤不浄として、とくに漁業の島、伊吹島では不漁になると忌み嫌われた。しかし、それだけではなく産褥期の産婦の養生という意味もあったともいわれている。出部屋で共同生活する母親どうしは「出部屋友達」として、その後も親しくつきあうという。「子どもたちはみな同級生やし、昭和二十二年生まれは600人いた。ここでは、出部屋は島人の原点なんよ」という島のお母さんの証言がある（『四国新聞』2006年3月12日）。出部屋は1970年まで使われていたが、現在は廃され建物も失われている。

第三、伊吹島は現在も島四国が存続している島である。四国八十八ヶ所巡礼のミニチュア版である島四国は、かつては瀬戸内の島のいたるところで見られたが、現在では過疎と近代化の影響で廃れている。しかし伊吹島では、現在でも旧暦3月21日、お大師様のご入定の日に島外から多くのお参りがある。この日は島の人々が心をこめてお接待をしている。また、かつては島の人々もよく四国遍路に出かけたようである。江戸時代に四国八十八ヶ所を24回も回った人の記念碑が残されている。伊吹島には、結婚前の女性たちが団体で四国遍路にでかける「娘遍路」の習俗もあった。現在、西の堂（おこじ）に昭和初期の娘遍路の記念写真がたくさん飾られている。若い女性十数人がおさまった写真がある。それぐらいの規模の団体で四国遍路をしていたようである。島遍路のほかに、伊吹島にはミニ西国三十三観音霊場もつくられている。霊場といっても石の観音様が一定の間隔で置かれているだけであるが、それらの江戸時代の観音像が風化したために、現在では古い観音様の横に真新しい石像が建て

られている。今も信仰は島の人々の暮らしに大きな意味をもっているのだと感じられる。

第四、正月、節分、百手祭り、神楽、秋祭り等の年中行事にも古くからの伝統が息づいている。百手祭りは弓祈禱・春祈禱などとも言って、弓矢を射て、矢の当たりはずれによって春のはじめに家の一年中の豊凶を占い、悪魔の退散を祈願する祭りとされている。通常旧暦2月1日に行われる。伊吹島だけでなく、詫間町、仁尾町の各地に残っている祭りである。秋祭りは収穫を神に感謝する祭りであり、燧灘沿岸の町ではちょうさ（太鼓台）が繰り出すちょうさ祭りである。伊吹島では、島全体が三支部に分かれてちょうさの担ぎ比べが行われるそうである。島の秋祭りでは、御神輿が舟に乗せられて島を一周する。三好兼光氏のホームページに昭和初期の祭りの様子と現状とが紹介されている。

第五、空き家になった幼稚園を改装した手作りの伊吹島歴史民俗資料館がある。昔の漁具、民具、文書、昔の生活を記録した写真など貴重なものが多数展示されている。これらの資料から、高度成長以前の自然と共生していた時代の日本人の暮らしが生き生きと甦ってくる。

(4) 漁業の厳しさ

伊吹島の周囲はたいへんよい漁場である。島の宿では新鮮な魚がたくさん食卓に並ぶが、それもまた伊吹島の旅の魅力のひとつである。現在はいいこの島として知られるが、昔は鯛、鱈が主役だったという。昔の主な漁法には、イワシ曳網、鯛の縛り網、打瀬網などがあった。イワシ曳網は現在のバッチ網の前身である。縛り網は、三好氏によると「一人の網元のもとに五十人から、七十人も漁夫と大小十艘前後の船数を必要とする大規模な漁業」であった。深い海で冬を越した鯛が春になると産卵に比較的浅い燧灘に集まって来る。それを大勢の船を繰り出して獲る漁法である。現在は鞆の浦で観光用にこの漁法が残っているが、それ以外はすべて過去のものとなった。伊吹島では江戸時代の終わり頃から行われており、捕獲した鯛は生きたまま大阪、堺などへ八挺櫓の和船で運ばれていたという（『観音寺市誌』915ページ）。打瀬網は、帆船による底引き網漁である。風力のみで漁場に行き、夜を徹して漁をする。高い操船

技術が要求される過酷な漁であった。伊吹島の打瀬船は、下行きと言って、かつては秋祭りが済むと八島灘、周防灘、豊前の海に出漁するのが恒例だったという。

冬の夜間の操業、波風・船酔いと戦い、何日も陸に上がることのない出漁など、かつては、漁業は厳しい生業だったようである。打瀬網漁について三好秋光氏の次のような文章がある。「波の高いほど、風の強いほど、網の勾配に気を遣い、その技術如何で漁が左右される。一日中、また夜通し風波にがぶられての貝漕は、海地獄のように思えたもので、船酔いも最初は黄水を、吐くものがなくなると血まで吐くようになる。手の皮が厚く足ようになって初めて一人前の打瀬乗りになり切るといふ。」

現在の伊吹島は夏のいりこ漁が主で、海岸に工場が立ち並んでいる。シーズン中は戦場のような忙しさだといふ。

(5) 瀬戸内海の中心の島

「伊吹島は香川県の西の端にある島ではありません。瀬戸内海の中心にある島です」とは、今回島を案内してくれた三好兼光氏のことばである。三好氏の島外への移動手段は船なので、地理感覚がわれわれとは全く異なる。海の上はすべて道である。たとえば、われわれが広島県の鞆の浦に行くとするれば、瀬戸大橋をわたって、陸路をぐるりと回って行くことになるが、三好氏によると「鞆の浦はすぐ目の前、見えてるでしょう」ということになる。船だと伊吹島から丸亀も、愛媛県の今治もあまり変わらない距離だといふ。われわれには今治がずっと遠いように感じられるのであるが。

こういう島の人々の感覚は、実際に島に行ってみないと実感として理解できない。実際に行くと海の向こうを眺めてみると、伊吹島が香川県の西の端にあるという見方は、ずいぶん偏った見方であることに気づかされる。県の境界にとらわれ、鉄道と車を移動手段と考えるなら「香川県の西の端」かもしれないが、船で自由に移動できるのであれば、愛媛県の今治も、広島県の福山も、丸亀と似たような距離にある。海路を中心に考えると、たしかに伊吹島は瀬戸内海の中心にある島なのである。

近代になって鉄道や道路が整備されるまで、長きにわたって瀬戸内海こそ日本のメインストリートだった。昔の人の地理感覚は、われわれより三好氏のそれに近かったはずである。こうしたことに気づかせてくれるのも伊吹島への旅の魅力であるように

思われる。

このように、伊吹島への旅は、まことに知的好奇心をかきたてられる旅といえるのである。ここには、歴史が身近に感じられる人々の暮らしがある。天水をだいに使う工夫など自然と共生する生活がある。夜は静謐そのもので、時間はゆったり流れるように感じられる。人間関係は濃密で、年中行事は今なお続いている。現代社会が失ってきたものを、ここではまだたくさん見出すことができる。日常に忙殺されているわれわれが真に必要としているものは何なのか、と考えさせられる島である。

参 考 文 献

- 柳田國男『定本 柳田國男集 第25巻』1970
観音寺市『観音寺市誌 通史編』1985
市原輝士、山本大『香川県の歴史』1971年

参 考 U R L

- 伊吹島の概要（2013年1月4日現在）
<http://www6.ocn.ne.jp/~kmiyoshi/page001.html>

（大賀睦夫）

筆者らはこの小論を、香川大学経済学部において地域社会システム学科を創設するために並々ならぬご尽力をされた故細川滋先生の霊前に捧げたいと考えます